災害科学国際研究所
IRIDeS
International Research Institute of Disaster Science

第 21 回日本集団災害医学会総会・学術集会で発表しました(2016/2/27-29)

テーマ：「むかしはいま、いまはむかし、未来はいま」、南海トラフ地震
場所：山形ビッグウイング（山形県山形市）

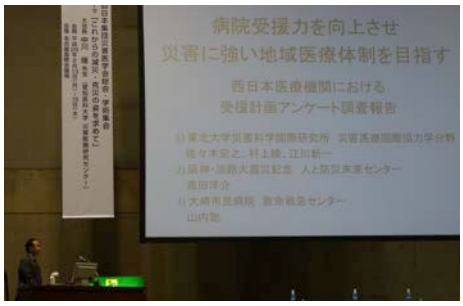
2016 年2月 27 日(土)～29 日（月）の３日間、山形県山形市の山形ビッグウイングにおいて第 21 回日本集団災害医学会総会・学術集会が開催され、当研究所の佐々木宏之助教（災害医学研究部門 災害医療国際協力学分野）がシンポジウム「南海トラフ関連地震を俯瞰する」で医療機関受援計画に関する研究成果を発表しました。

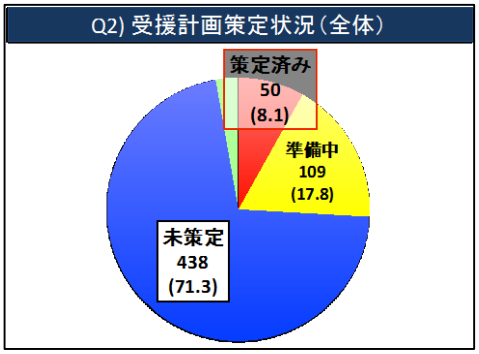
日本集団災害医学会総会・学術集会は災害医学・災害医療を主眼においた国内で唯一の学会で、阪神淡路大震災を契機に発足し、災害医療従事者はもとより救急・消防・防災行政関係者が一堂に集結し、国内外で発生する様々な災害についての最新研究成果、事例報告を行います。日本全国の DMAT（Disaster Medical Assistance Team、災害派遣医療チーム)、災害拠点病院関係者のほとんどがこの学会に集結し、日本の今後の災害医学・災害医療のあり方について協議し、方向付けを行います。当日は日本全国から 1700 名を越す関係者が山形に集まりました。

東日本大震災から５年の節目を迎える今回の学術集会では「むかしはいま、いまはむかし、未来はいま」のテーマに沿って、貞観地震と東日本大震災の対比や、東日本大震災被災地医療の現状とこれから、将来の災害医学のあり方など、多岐にわたる議論が繰り広げられました。また、佐々木助教が研究の主テーマとしている医療機関受援計画については、「受援」という言葉が医療の世界においてもかなり浸透してきた感があり、受援・支援のセッションが設けられるなど、「助ける側」からの視点のみならず「助けられる側」からの備えも重要であることが認識されてきました。事前報道の影響もあり、会場では受援に関する活発な討論が繰り広げられました。また、佐々木助教の提案する受援計画に関するガイドライン・雛型の策定については、学会長総括のなかに盛り込まれ発表されました。

学会初日には、当研究所所長 今村文彦教授（災害リスク研究部門 津波工学研究分野）が招待講演１「東日本大震災を踏まえた減災システムのあり方―津波から命を守る教訓を伝える-」をテーマに講演しました。また、同夜ホテルメトロポリタン山形において全員懇親会が開催され、会場は「笑顔の見える関係」構築にいそしむ参加者の熱気に包まれました。

次回、第 22 回は 2017 年2月 13-15 日に名古屋国際会議場（愛知医科大学災害医療研究センター主管）で開催される予定です。





【写真】　左：研究成果を報告する佐々木助教。　中：シンポジウムで発言する佐々木助教。
右：東海～九州の南海トラフ地震被災予想府県 16 府県にある医療機関の受援計画策定状況

文責：佐々木宏之（災害医学研究部門）